

脊椎内視鏡下手術の進化・深化

西良浩一

Koichi SAIRYO

徳島大学整形外科

この度、「脊椎内視鏡下手術の進化・深化」の編集を担当いたしました。わが国における脊椎内視鏡の歴史は1996年頃と記憶しています。山縣式、出沢式が原型と思います。1998年MED法登場で、瞬く間に国内に広がりました。和歌山県立医科大学の吉田宗人先生の功績が大きいです。私も2000年にMED法を開始しました。今回、総論としては内視鏡手術の黎明期から現在までの経緯、さらに国内の現状を解説していただいております。MEDに加え、2003年より国内にPED法が帝京大学溝口病院の出沢明先生により導入されました。しかしながら現在ではPEDとは呼ばれず、FESSと呼ばれます。その変遷についても総論で解説いたしました。

各論としてはMEDとFESSの2つを用意しました。MED法としてはまず、現在多くの施設で行われている、腰部ヘルニア摘出術と狭窄症除圧MEL法、そして頸椎除圧術への応用を解説していただきました。また、近年固定術への応用も進んでおり、その最先端技術にも触れていただきました。FESSも同様に椎間板ヘルニア摘出術と狭窄症除圧術の最前線が解説されています。FESSを使った固定術としまして、国内ではPELIF(2017)、PETLIF(2018)、FE-KLIF(2019)の名称・手法がありますが、この度はFE-KLIFについて詳細に触れていただきました。MEDおよびFESSともに固定術への応用がcutting edge technologyであることがわかりいただけるものと思います。

さて、最後に今後の展望として、痛みの可視化を設定しました。無血管で灌流下に行う全内視鏡手術ならではの領域です。FESSによる除痛手術としては椎間板性腰痛に対するthermal annuloplasty、Modic changeに対するdisc cleaning、慢性腰痛に対するリゾトミーがございます。術中内視鏡で観察できる特徴的所見を読者の皆様と共有したいと思います。想像を超える世界がみえると思います。

脊椎内視鏡が始まり約30年。光学機器、手術機器、技術、さまざまな進化により当初からは考えられない領域に適応が深化しております。次の進化と深化は、本特集号を読み脊椎内視鏡に興味を持っている若手整形外科医の肩にかかっています。未来のために次世代スタンダードを創るステップとして、本特集号が役に立てば編集者冥利に尽きます。